

「牧水研究」第十一号 黒岩剛仁

宮崎から、年に二冊ほどのペースで不定期に届く「牧水研究」。毎号充実した読み物が掲載されていて楽しみなのだが、第十一号では、吉川宏志の「自然主義と技巧——『創作』における牧水と夕暮」に注目させられた。

この研究論文において、吉川は、明治四十三年三月に創刊されて翌年十月に解散してしまった「創作」誌上での約一年半の若山牧水と前田夕暮の作品を中心に、主に牧水と「自然主義」との関係について考察している。三つの章に分けて丁寧論じられている吉川の指摘は、いずれも説得力のあるものであった。

牧水は初め、「恋」そのものが「自然」だと考えた。しかし、恋に破れることにより、それは完膚なきまで否定される。だが、牧水は恋に苦しむ自分自身の姿を深く追究することにより、再び「自然」の姿に迫ろうとする。牧水にとつての「自然主義」はこうした二つの段階をもって深められていったと言っただろう。

最初の章の結論部分である。牧水は、田山花袋の『重右衛門の最後』や『蒲団』からの影響を受けたようだ。

次の章では、技巧不用論に傾いていく「自然主義」の潮流に対して、牧水が書いた反論を紹介するなどしながら、歌とそこに詠

まれた事実とが別物であることを牧水がきちんと認識していたと述べる。

じつさい、自然主義作家たちは、自らの体験した「事実」を赤裸々に告白することに随するようになり、急速に力を失っていく。明治四十四年の段階で、「事実」と「歌（作品）」を分離して考えていた牧水には、やはり文学の本質を見通す眼があったといえるのではないか。

そして、いよいよ最後の章では、牧水と夕暮の作品が比べられ、石川啄木の評論「時代閉塞の現状」もが補助線として用いられつつ、結論が導かれる。

（前略）牧水における「自然主義」はあくまでも〈個〉にとどまるもので、近代社会に対する直接的な批評性を帯びたものにはならなかったことは認めねばならないだろう。社会や時代がどう変わろうとも、自分の生活と身辺の自然を柔軟に歌い続ける牧水の姿勢は、じつに潔い。だが、それは石川啄木や前田夕暮が見出そうとしていた短歌の可能性を、断念したところから生まれてきたものであることも、また確かなのではないだろうか。

このように、吉川は、若干口籠もりながら牧水における自然主義を位置づけているのだが、私にとつてはとても示唆に富む論考であった。

伊藤一彦の力作論文「運命の女―小枝子（下）」の終わりに、「牧水の恋愛はこれからが第二段階である。が、長くなりすぎた拙文をここで一応閉じたい」と記されていた。まだまだ続きを読みたいと思つたのは、私だけではないだろう。